立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０２４年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	現代心理学研究科　映像身体学専攻		
研究代表者（2025年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年	氏　名		
	☐博士前期課程　年 ☑博士後期課程２年	菅藤　絢乃		
指導教員	所属部局・職名	氏　名		
	現代心理学部・教授	大山　載吉		
自然・人文・社会の別	自然　・　(人文)　・　社会	**個人・共同の別**	(個人)　・　共同　名	
研究課題	サンドラ・ロジェの連続テレビドラマ論にみる人間の〈生〉と〈連続性〉			
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2025年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名		
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程・２年	菅藤絢乃		
研究期間	２０２４　年度			
研究経費（1円単位）	（支出金額）21,826円　／（採択金額）200,000円			

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

当該研究の研究目的を含むこと。

本研究は、サンドラ・ロジェ(Sandra Laugier,1961-)による連続テレビドラマ論の主要な概念について分析し、さらにはそれらを踏まえて作品分析を行うものである。その目的は「連続テレビドラマという表現形式は人間の〈生〉をいかに変容させ得るか」という問いを明らかにするためである。ロジェが連続テレビドラマの表現形式について「繰り返しの接触と愛情のモデル」と定義していることを踏まえ、視聴者と作品の間で育まれる「愛情」の一事例として、NHK連続テレビ小説『おかえりモネ』の作品分析を行い、私たちの生活において連続テレビドラマがいかにその固有性を発揮するかを示す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔サンドラ・ロジェ〕〔連続テレビドラマ〕〔　〕

研究成果の概要（図・グラフ等は使用しないこと。）

以下の視点を含めて記載のこと。
・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか（できなかったのか）。
・何をもって研究成果（経過）を達成できた（できなかった）と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

本研究は、「サンドラ・ロジェの連続テレビドラマについての分析」と「NHK 連続テレビ小説『おかえりモネ』の分析」の二つの分析から構成される。その成果の概要は以下の通りである。なお、採択者は 2024 年度秋学期に休学をしたため、成果は休学前と休学後に分けられる。

１．サンドラ・ロジェの連続テレビドラマ論についての精読・分析

『Nos vies en series』(2019)の英訳版『TV-Philosophy: How TV Series Change our Thinking』(2023、以下『テレビ-哲学』)および『TV-Phylosophy in Action: The Ethics and Politics of TV Series』(2023、以下『実践』)の精読と分析を行なった。

ロジェが連続テレビドラマの研究を行う姿勢は、連続テレビドラマを哲学の材料として、つまりは哲学が「世界の見方」を論じる際に「社会を映す鏡」(Laugier 2023b: 2)として一例となって手助けとなるものとして捉えるものではなく、「連続テレビドラマは、私たちにもたらす変容を通して、世界に対して具体的に作用し、世界に働きかけるものである」(Laugier 2023b: 2)という観点によって支えられている(Laugier 2023b: 2)。連続テレビドラマを対象として哲学の観点から分析するのではなく、連続テレビドラマという表現形式が引き出してくる自身の思考を掬い取り、記述することを試みるロジェの仕事は、それそのものが哲学的な営みであるといえる。『実践』はその名の通り連続テレビドラマが引き出したロジェの思考の記述であり、連続テレビドラマそれ自体が視聴者に「哲学させる」ことを理論的に打ち出す『テレビ-哲学』と合わせて、この 2 冊はロジェの連続テレビドラマ論を両輪として支えるものである。この「テレビ哲学」という研究分野は、接触と愛情のモデルが叶える道徳的教育、延いてはそれが民主主義を広めていくことなど、連続テレビドラマに固有の力を対象とするのと同時に、連続テレビドラマによって視聴者一人ひとりが触発され、自らの内側から引き出される思考を捉えることを目的としており、今後より一層の発展が望まれると考えられる。

以上、ロジェのテレビ哲学の本質を把握するなかで、ロジェが連続テレビドラマ論を展開するにあたって多大な影響を受けたと考えられるスタンリー・カヴェル(Stanley Cavell,1926-2018)の道徳的完成主義やテレビ論等の読解が必須であることも明確になり、この点についてまでは研究を進めることができなかったため、次年度以降の課題としたい。

以上が休学申請前の研究の成果であり、以降は休学申請後の研究の成果である。

２．NHK 連続テレビ小説『おかえりモネ』の作品分析

１で明らかにした「連続テレビドラマを対象として哲学の観点から分析するのではなく、連続テレビドラマという表現形式が引き出してくる自身の思考を掬い取り、記述する」という方法を実践し一事例として提示することで「テレビ哲学」という研究分野に寄与するため、『おかえりモネ』の分析を行なった。

東日本大震災から 14 年が経過、また、コロナ禍へと突入した 2020 年からは 5 年が経過し、自然災害やパンデミックによって生活を奪われ脅かされる経験や、それに付随する無力感は、現代の日本社会に通底するものであると考えられる。文学や映画、舞台などの大衆文化は社会状況を鮮明に反映して制作され、そうして発信された作品は人々に受容されることによってまた社会を形成する。それは「時代を映す鏡」(影山 2019：3；岡室 2024：3)と呼ばれるテレビもまた例外ではなく、現代の連続テレビドラマを研究することによって東日本大震災を経験しコロナ禍中にある私たちのあり方を考察することができると考えられる。

研究成果の概要（つづき）

そこで、本分析では、『おかえりモネ』を構成する「登米・気仙沼編」「東京編」「気仙沼編」のそれぞれにおいてヒロイン・百音が抱える課題とその変化の描かれ方をシナリオ分析によって抽出し、それらを比較することによって、『おかえりモネ』は百音が「誰かの役に立ちたい」と願う少女から「ただそばにいたい」を体現する女性へと変化する終わりなき成長物語であることを提示した。これにより、『おかえりモネ』は自然災害やパンデミックを内包する現代社会を生き続ける人間のひとつのあり方を提示しているということを明らかにした。

以上より、本研究は「連続テレビドラマという表現形式は人間の〈生〉をいかに変容させ得るか」という問いを明らかにするにあたり、連続テレビドラマと人間の〈生〉のあいだで育まれる「愛情」の形の一事例を作品分析の論文として投稿を行なったことにより、当初の研究計画に対しての成果を得ることができたと考えられる。一方で、ロジェの「テレビ哲学」の背景にある文脈については研究が行き届いていないことが反省点として挙げられ、次年度以降への継続的な研究が必要であると考えられる。

【引用・参考文献】

安達奈緒子、2021、『おかえりモネ』NHK。
影山貴彦、2019、『テレビドラマでわかる平成社会風俗史』実業之日本社。
Laugier Sandra、2023a、『TV-Philosophy: How TV Series Change our Thinking』University of Exter Press。
Laugier Sandra、2023b、『TV-Philosophy in Action: The Ethics and Politics of TV Series』University of Exter Press。
岡室美奈子、2024、『テレビドラマは時代を映す』ハヤカワ書房。

研究発表（研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください　（紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください）。

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

※修士論文・博士論文は含みません。